杏林大学病院ニュース

No. 15
発行 2011.1.27
編集 付属病院

地域医療の充実をめざして
関係機関の皆さまとともに

contents

・新年のご挨拶
・新病棟新築工事の地鎮祭
・杏林大学病院で消防演習を実施
・診療科紹介
神経内科 / 精神神経科 / 小児外科
・看護部公開講座

【杏林大学医学部付属病院】
〒181-8611 三鷹市新川 6-20-2
TEL 0422-47-5511（代表）
http://www.kyorin-u.ac.jp/hospital/

■ 新年のご挨拶 ■

明けましておめでとうございます。穏やかな初春をお迎えの事とお慶び申し上げます。

昨年は多剤耐性菌の院内感染が大きな社会問題となりました。アシネトバクター・バウマニ、多剤耐性緑膿菌、MRSA などです。ハイリスク症例を扱う医療機関には常在している問題です。当院においては、院長直属の委員会として、感染防止委員会が設置され院内のラウンドを行い、常に目を光らせています。今後も引き続き、気を許すことなく注意して対応していきたいと思います。

当院は暖かい心のかよう、満足度の高い医療の提供をモットーとしております。そして地域に根を下ろした医療の推進を目指しております。近隣住民の方々が、誇りに思い、安心出来る組織の構築を目指しております。全職員の 1 日 24 時間の努力の結果、社会的な評価も着実に上がっております。

本年も当院の更なる発展のためにより一層の努力をすることをお誓いいたしますので関係各位のご理解、ご協力、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

皆様にとって本年にご多幸がありますようお祈り致しております。

杏林大学医学部付属病院病院長　甲能直幸

■ 工事の安全祈り 新病棟新築工事の地鎮祭

老朽化に伴って第三病棟が解体され、その跡地に建設される新病棟の新築工事が本格的に始まるのに先立ち、1月21日（金）、安全を祈って地鎮祭が執り行われました。

地鎮祭には、本学の松田博青理事長をはじめ、松田剛明副理事長、跡見裕学長、甲能直幸病院長ら学園・病院関係者と、㈱竹中工務店代表取締役社長の竹中統一氏、三機工業㈱代表取締役社長の有馬修一郎氏ら建設関係者が出席しました。

祭祀は、第三病棟跡地に設置された紅白幕の飾られた特設テント内で行われ、荻窪八幡神社の小俣宗昭宮司により厳かに進められました。

穿初の儀（うがちぞめのぎ）では、松田理事長が盛り砂に3度鍬を入れ、竹中社長と有馬社長が鋤で砂をすくいました。続いて、松田理事長、跡見学長らが玉串を祭壇に捧げ、工事の安全を祈願しました。

新病棟は、地上10階、地下1階RC造（一部SRC造）、基礎免震構造で延床面積は約2万2千㎡。病床数は約370床で、集中治療室、一般・個室病棟を有し、屋上には救急搬送や災害時に利用するヘリポートを設置します。

新病棟の完成は、平成24年8月中旬頃を予定しています。

新病棟完成予想図

■ 杏林大学病院で消防演習を実施

昨年11月19日（金）、三鷹消防署協力のもと、杏林大学医学部付属病院のセンタープラザで消防演習が行われました。

訓練は外来棟3階の給湯室付近から出火したという想定に基づき、防災センターで火災を確認したことを受けて警備室へ報告、自衛消防隊員が現場に急行して教職員の避難誘導が手際よく進められました。また、3階と6階に2名ずつ合計4名が逃げ遅れたという想定で、はしご車でその4名を救出する訓練や、ポンプ隊2隊と自衛消防隊が出動して一斉放水して消火する訓練が行われました。

訓練を終えて、当院の中野利晴病院事務部長が「患者さんの安全を守るためにも、今日の訓練の成果を生かしていきたいと思います」と講評をしました。続いて、荒井弘三鷹消防署長からは「災害が起こるいざという時、それに備えておくことが大切です。こういった訓練を繰り返し、折にふれて注意を喚起していくことが防災につながが

ります。引き続き訓練を重ね、病院の安心・安全を確保していただければと思います」とのお話をいただきました。

会場では、防災体験コーナーが設けられ、はしご車の搭乗体験や起震車による地震体験、消火器を使っての初期消火訓練が行われました。また、応急手当や防災用品のコーナーも展示され、教職員一同、防災と災害時の心構えを考える良い機会になりました。

診療科紹介

◆神経内科

他科との連携を図り、質の高い医療を提供

神経内科では多摩地区における基幹病院の一つとして神経内科疾患全般に対応できるように取り組んでおります。

当科の扱う疾患は外来と入院では、かなり対象が異なります。外来疾患としては、頭痛が最多で、ついで眩暈が多くなっております。その他には運動麻痺、感覚障害（しびれ）、不随意運動、認知症、高次脳機能障害などが当科を受診される患者さんの症状としてよくみられるものです。これらの症候や訴えから正しい診断を導き出すのが当科の第一の役目であり、診断によっては脳神経外科、耳鼻科、整形外科など、他科での治療に適切につなげていくこともあります。入院となる疾患は脳卒中（脳梗塞や脳出血）が最多ですが、これに対しては脳神経外科、リハビリテーション科と共同で脳卒中センターを運営し迅速な対応体制を整えています。神経感染症（髄膜炎など）や、パーキンソン病などの神経変性疾患についても、必要に応じて他科との有機的かつ効率的な連携を図りながら、神経内科疾患の患者さんに質の高い医療を提供できるように努めております。

今後も医局員一同研鑽を積む所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆精神神経科

専門医による特殊外来で、受診される方に応じた医療を提供

精神神経科は、32床の開放病棟と1床の隔離室を持ち、常勤医12名、精神保健指定医8名が在籍し診療に取り組んでいます。当科の外来及び入院にとどまらず、総合病院精神科としてリエゾンについても力を入れています。対応する疾患として、統合失調症や気分障害（うつ病、躁うつ病）、神経症性障害（パニック障害、強迫性障害）、睡眠障害（睡眠時無呼吸症候群、過眠症、睡眠覚醒リズム障害、ムズムズ脚症候群）、認知症などがありますが、中でも抗うつ薬に反応しない難治性うつ病に対して、入院による経頭蓋磁気刺激療法を行っており成果をあげています。また、特殊外来として当科の睡眠専門医による睡眠外来を設けており、神経症性不眠や精神疾患による不眠を除く睡眠障害について診断及び加療を行っています。

当科では、受診される方に応じた最善の医療を提供するよう心掛けています。

◆小児外科

様々な取り組みを通じ、小児医療に貢献

小児外科についてご紹介したいと思います。

当科では、28年間トップにあった伊藤泰雄教授の退任に伴い、平成21年4月から、韮澤融司教授が主任教授となりました。韮澤教授は、平成21年に日本小児外科学会理事8人のうちの1人に選任され、グローバルな視点で日本の小児医療の未来に向けて、様々な問題に取り組んでいます。

また、渡辺佳子医局長は北海道の大自然の中で行う、病気の子供たちのためのキッズキャンプ、〝そらぷちキッズキャンプ〟に平成20年より毎年ボランティアとして参加しています。キャンプには当院で診療を受けている子供たちも参加しており、看護師もボランティアで毎年同伴しています。

さらに、浮山越史准教授は少年サンデーで連載されている小児外科医の漫画〝最上の命医〟の医療監修を担当しています。この度、この作品がテレビ東京でドラマ化され、平成23年1月から放送が開始されました。

今年もスタッフ一同、様々な取り組みを通じて、小児医療に貢献したいと考えています。

■■ 看護部公開講座 ■■

看護部では、地域の看護職者の方々も参加できる公開講座を毎年実施しています。今年度は、12月25日（土）に静岡県立大学大学院教授の紙屋克子先生をお招きし、「遷延性意識障害患者の看護とその実際」と題した講演会を開催しました。紙屋先生は一貫して意識障害患者の看護の実践と研究に取り組んでおられ、これまでに意識障害のある患者さんの劇的な回復を看護の力で実現し、看護師の存在価値を社会へアピールした第一人者です。

講演会には外部から50余名の参加があり、参加者からは紙屋先生の体験をもとにしたお話に、「意識障害になってからの年月に関係なく、看護の力で変化を起こすことができるってスゴイ」「私たちが諦めたら終わってしまうんだ」「自分が日々受け持つ患者に対して何が提供できるのか、もう一度考え直す貴重な機会となった」等々の感想が聞かれ、盛会裡に終了しました。

＊来年度の公開講座に関する詳細は、当院看護部のホームページにてお知らせいたします。